

初 版

興味をひく教材作成に
チャレンジしよう！

集中力を高める活動に
ICTを活用しよう！



『ICTを使って外国語活動！
特別支援学級 編』

共同編集

旭川英語教育ネットワーク（AEEN）

&

愛媛大学英語教育センター（中山晃）

助成元

財団法人 パナソニック教育財団

FOR WHOM?

このパンフレットは、特別支援学級で外国語活動を行う際の留意点や実践例を、写真と付録DVDに収録されている動画や資料を使って解説するのもです。

特に、ICTを使うことで、より効果的に教材を提示できたり（視覚優位の子達への**理解支援**）、発話を促したり（発話や意見をやる際の代替的な役割を果たしてくれるという**発表支援**）ができるということの実践例を紹介します。

なお、付録のDVDには、実践例や授業風景の動画以外にも指導案やすぐ使えるパワーポイントのスライド、素材などが含まれており、本パンフレット一式を用いた「特別支援学級での外国語活動におけるICT活用のための校内研修」にもご利用いただけるようになっています。

本パンフレットと付録を活用していただくことで、日々の授業の一助となることを願っております。

旭川英語教育ネットワーク(AEEN)

& 中山晃（愛媛大学英語教育センター）



CONTENTS

For Whom?

特別支援学級での外国語活動 1

声：ICTを活用するという視点 3

コラム：通常の学級で障害を持つ児童が外国語活動を行う場合 4

機材の配置 5

実践例集

事例1 6

事例2 7

事例3 8

事例4 9

事例5 10

実践者からのコメント 11

付録のDVDの内容について 12



可能性

特別支援学級での外国語活動

(平成23年度からの必修化をむかえて)

「子どもたちの特性」と「外国語活動の特徴」を考えると、特別支援学級で外国語活動を行うことの意図と可能性が見えてきます。

子どもたちの特性

- 興味・関心が狭い → ゲームなど楽しい活動が多い
- 粗大運動や協応運動などが苦手 → ダンスなど体を動かす活動が多い
- 耳からの情報が入りにくい → 視覚に訴える教材が多い
- 気持ちを読み取るのが苦手 → コミュニケーションの活動が多い

外国語学習の特徴

なぜ

グローバル化が進む現代、障害のある人もそうでない人も、日常の生活で外国の文化や人と接し、様々なところで関わりあいながら生活しています。

通常学級の児童と同様に、外国語を通して(それぞれの児童のニーズに合った様々な学習の工夫をしながら)コミュニケーション能力の素地を養ってゆきましょう。

課題

実際には、『教室環境』や『マンパワー(サポート体制)』、『児童一人ひとりの特性』など、授業実践には考慮しなければならぬ実情がたくさんあります。

しかしながら、それ以上の期待と効果、可能性があるといえます。

児童の特性と外国語活動

特別支援学級においては、一人ひとりの児童の実態を的確に把握し、それぞれのニーズにあった外国語活動を構成することが重要です。

例えば、特有のこだわりがある児童には、教師の発音を反復し、記憶した言葉を時間が経過しても言うことができるという特性があります。

また、日本語よりも抑揚があり、表情や動きを大きく伴う英語は、コミュニケーション力の育成に新鮮な刺激を与えるものであり、リズムカルな歌、アート、ゲームなどを通して英語という音を楽しみ親しむことで、表現することの楽しさや大切さも体験できるのではないのでしょうか。

さらに、日本語では、学年が上がるにつれ、習得に差がありますが、外国語ではその差が小さく、劣等感を抱くことも少なく、通常学級に行ったときでも楽しめるといふ学習効果も期待されています。

歌やダンス、ゲームなど楽しいActivityがいっぱい

歌やダンスで、情緒や身体
の解放しよう！



ゲームを通して、感情の
コントロールを学ぼう！



児童の特性に合わせた活動を
取り入れてみよう！

ペアワークや少人数活動など
『会話』が中心

ペアワークやグループ活
動で、コミュニケーション
能力やソーシャル・ス
キルの向上をめざそう！



映像や音楽教材が豊富

視覚優位の子どもたちや
音楽が得意な子どもたち
にも有効！



ICT活用 「声」

ICTを活用するという視点

中富良野町立中富良野小学校
久保 稔 先生（北海道）

子どもたちの特性を知ることからはじめる

特別支援学級に在籍する児童は、困り感（つまずき）や生活経験の不足などの様々な特性をもっています。

しかし、中には視覚情報を理解（処理）しやすかったり、興味のあることには集中力が持続したりするなど、正の特性もたくさんもちあわせています。



私の授業

私の学級では、普段の学習でもピクチャーカードやNHKの番組などを活用し、児童が理解しやすい手立てを講じています。

視覚優位な児童の場合、視覚に訴えるものがあるかないかで、集中力や学習内容の定着という点で大きな差が生まれます。

現在は、児童の興味をひきつけるICT教材開発をすすめるとともに、児童の特性に応じたアクティビティーやカリキュラムの研究を行っています。

成果と課題

成果1 歌やチャンツにあわせて行う活動が、子どもたちの実態にあっていた。

成果2 ICTを用いることで、興味や関心を高めることができ、意欲的に活動する姿が見られた。

今後の課題として、個々のよさを生かした活動の構成や個別の目標と外国語活動の関連性、より効果的なICTの活用法の習得などを考えています。

通常の学級で障害を持つ児童が 外国語活動を行う場合

旭川市立愛宕小学校
塚田初美 先生（北海道）



特別支援学級の児童が通常の学級で外国語活動の学習をすることについて特別支援学級の担任と通常学級担任の連携ということを前提に整理してみました。

ねらい

特別支援の児童に効果的なことは、すべての児童にも効果的であるということに基づいています。

通常の学級にいる児童にも能力差はあり、視覚的なものを使って説明したり、スモールステップで進めば、誰にとってもわかりやすいということになります。

活動のポイント

ゲームは、ルールを守る、負けを受け入れる、相談・協力などソーシャルスキルの要素を多く含んでいるのでアレンジ次第では、すべての児童が仲良く積極的に参加できるものとなります。

特別支援学級で前もって個別に 学習内容について取り組む (特別支援学級の担任が指導)

1. 活動内容を具体的に！

ICTやカード、歌、チャンツなど、具体的な活動をおこなうことで、交流学級に行ったときに、見たことややったことのある教材やアクティビティであれば安心して取り組むことができる。

2. 事前に練習！

ルール理解の苦手な子どもには、前もって同じゲームを特別支援学級で行っておきましょう。

旭川市内の小学校では、『シアター』と呼ばれるSSTをよくやっています。特別支援学級で先生たちがあらかじめ、子どもたちの間で起こりそうなトラブルを考え、寸劇を見せて考えさせるものです。

例えば、ゲームをしていて、負けそうになったら、騒ぎ出して、トランプをひっくり返してしまう児童の役を先生がやって見せる。そして、子どもたちに考えさせるというものです。



通常の学級でのゲームに特別支援 学級の児童が楽しく参加するため に(通常学級の担任が指導)

1. 活動内容をパターン化！

例えば、『What do you want to be?』の学習の場合『I want to be a ~ when I grow up.』というように英語ノートおよび、そのDVDでは表現されています。そこでペアアクティビティやグループ活動のときに、

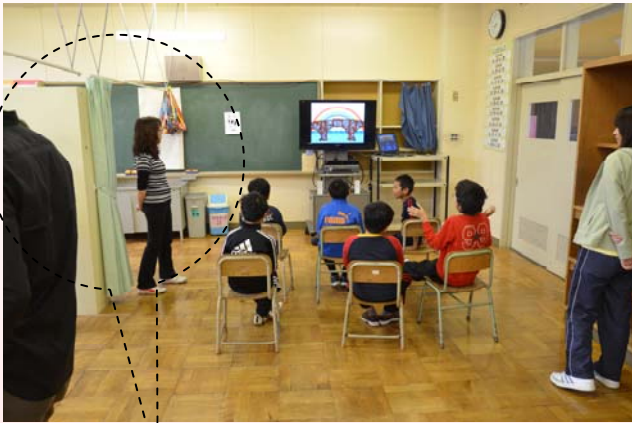
パターン1：むずかしそうだったら、『単語だけでもいいよ。』と指示。

パターン2：発語が苦手な児童には、絵カードを持たせておいてそれを指さして答えたり、『ジェスチャーや「らくらくペン^(注)」で答えてもいいよ。』と指示。

2. 活動はスモールステップで！

例えば、最初は、3種類のカードから、徐々にカードの種類を増やすなど、少しずつ、ルールを増やしていく。また、ルールがわかりやすいように、言葉だけではなくルールを書いた表、図、絵など視覚的に確かめられるものを用意する。その上で、順番が守れるように、順番表など視覚的に確かめられるものを用意する。

(注)「らくらくペン(成美堂)」については実践例5を参照してください。



(注1)中富良野町立中富良野小学校では、個別活動用に区切られたスペースを設けています。

機材の配置を工夫してみよう！

【電子黒板とその周辺】

黒板の横に配置することが多いと思います。黒板には、授業のスケジュールや活動内容を明示しておく、子どもたちも混乱しません。なお、ノート型PCを接続しやすいように、シェルフも用意しておく便利です。

教室が個別活動（小集団活動等）用^(注1)に区切られている場合は、電子黒板を全体で使うことを想定して、全体活動スペースに配置します。

写真では通常の椅子を使用していますが、子どもたちの実態に合わせて、例えばクッション入りのカラブロックなどを使うのもよいです。外国語活動が始まる合図にもなりますし、お気に入りの色には落ち着いて座ってくれるという事例もあります。

【PCを使う】

特別支援学級では、比較的少人数で活動を行う場合が多いとおもいます。電子黒板を使うのをためらってしまう場合や電子黒板のある教室が使えない場合などの際は、PCのモニターを代用して使うこともよいでしょう。

PC画面だけを見るという活動では飽きてしまいますので、表示されたものについては、具体物を用意して提示したり、それを利用してクイズやゲームをすることで子どもたちの興味を引いたり、集中力を持続させたりすることもできます。

特別支援学級の場合は、子どもたちの実態にあったものを用意して活用するという柔軟な対応が必要になるでしょう。



実践例 1

電子黒板で読み聞かせをしてみよう！



(注) 書名: Binky, 作者: Leslie Patricelli, 出版元: Candlewickを使用しました。

【必要な機材・教材】

電子黒板 (又はPCモニタ)
スキャナー、PC、絵本

【実践での所要時間】

15分程度の活動

【実践者】

久保稔先生 (中富良野小)

久保先生が考えていたこと

- ・ 集中力を向上させたい
- ・ 本に興味を持ちにくいので、何かよい方法を見つけたい

DVDを活用しよう！

- ・ 実践の様子動画 (ファイル名「ICT読み聞かせ」) を参考にしてください。
- ・ 「指導案」のPDFファイルもありますので、研究授業など実践する上での参考にしてください。

実践でのポイント

「読み聞かせ」は、教員が絵本を持って、子どもたちに提示して行います。しかし、隣のページが見えてしまったり、絵本では細かいところが不鮮明だったりします。

そこで、絵本をスキャナで読み取り、PCを経由して、電子黒板で行ってみましょう。大きな画面で見ることができ、効果音を足すこともできるので、子どもたちの興味を引き、集中力の持続も期待できます。

「授業」と「授業の過程」という教育的な使用に限定し、引用元 (出所) を明記することで授業での実践に使えます。詳しくは、DVDに収められている「著作権について」のフォルダを参照してください。

実践例2

プレゼンテーションソフトを活用しよう！ ～ What's missing?～



【必要な機材】

電子黒板（又は大きなPCモニター）、
PC、プレゼンテーションソフト

【実践での時間】

10分程度の活動

【実践者】

久保稔先生（中富良野小）

久保先生が考えていたこと

- ・ 勝敗を気にせず活動させたい
- ・ 友だちと協力する活動をさせたい

DVDを活用しよう！

- ・ 実践例フォルダ内に実践の様子
の動画と実際に使用したファイル
があります。題材を変える
ことでオリジナルの教材を作れ
ます。
- ・ 「指導案」のPDFファイルも
ありますので、研究授業など実
践する上での参考にしてくださ
い。

実践でのポイント

あらかじめ、動物や食べ物などの
絵をいくつか画面上に提示します。
その後、「What's missing?」と
いう画面に移行し、再度、動物や食
べ物の画面を提示します。このと
き、最初に映したものの1つを消し
てしまいます。

最初の画面にあったものがなくな
っていることに気が付くと子ども
たちは元気よく答えてくれます。P
Cのプレゼンテーションソフトを使
うことによって、このICT教材は
簡単に作成できます。

子どもたちの興味に合わせて様々
な題材を選べるのでとても汎用性
が高い教材を作ることができます。

実践例3

ソーシャルスキルトレーニング(SST)を取り入れてみよう!



【必要な機材】

電子黒板（又は大きなPCモニター）、
PC、デジタルカメラ

【実践での時間】

10分程度の活動

【実践者】

塚田初美先生（愛宕小）

塚田先生が考えていたこと

- ・ SSTを取り入れた活動させたい
- ・ 身近な題材をあつかいたい

DVDを活用しよう!

- ・ 実践例フォルダ内に実践の様子の動画と実際に使用したファイルがあります。題材を変えることでオリジナルの教材を作れます。
- ・ 「指導案」のPDFファイルもありますので、研究授業など実践する上での参考にしてください。

実践でのポイント

日本語では、感情を「ことば」と「ジェスチャー」の組み合わせで表すことは多くないかもしれませんが。しかし、英語では、体いっぱいをつかって表現することはよくあることです。そこで、「楽しいな」、「悲しいな」、「おなかがすいたな」、「怒ってるよ」などの感情を英語で表現させながら、SSTをやってみませんか。

画面に「おなかがすいたな」という担任の先生の顔が出てきたとき子どもたちは喜んでくれました。PCのプレゼンテーションソフトとデジタルカメラを使うことで、身近な人や題材をテーマにしたSSTのICT教材が作れます。

実践例4

デジタル教科書を使ってみよう！



(注) 画面は「わくわく英語タイム1（光村図書）」のものです。

【必要な機材】

電子黒板（又は大きなPCモニタ）、
PC、デジタル教科書

【実践での時間】

15分程度の活動

【実践者】

松田泰生先生（向陵小）

松田先生が考えていたこと

- ・ 授業を視覚化したい
- ・ 学習レベルを落とさずに、
授業を本質化したい

DVDを活用しよう！

- ・ 実践例フォルダ内に実践の様子
の動画があります。実践では、「わくわく英語タイム1・2（光村図書）」と「デジタル掛図1・2（東京書籍）」を使用しました。
- ・ 「指導案」のPDFファイルも
ありますので、研究授業など実践
する上での参考にしてください。

実践でのポイント

ICT教材がどんなものか具体的なイメージがわからないという先生方は、既にあるデジタル教科書を使ってみてはいかがでしょうか。

アニメーション動画や歌など、視覚に訴え、体を動かすことができるアクティビティーが満載です。

画面に出てきたキャラクターを気に入って、英単語を覚えてみようと思ってみたり、子どもたちの興味は意外なところからわくものです。

シンプルで使い勝手のよい教材もありますので、子どもたちの実態に合った教材を手にとってみてはいかがでしょうか。

実践例5

子どもたちに先生になってもらおう！ ～ 発話の代わりにしてくれる教材 編 ～



【あると便利な教材】

「らくらくペン（成美堂）」など

【実践での時間】

15分程度の活動

【実践者】

中川麻衣子先生（永山南小）

中川先生が考えていたこと

- ・ 他人への関心を高めたい
- ・ 自己表現を手助けしたい
- ・ 電子黒板が使えない場合の活動を工夫したい

DVDを活用しよう！

・ 実践例1～4は、電子黒板とPCを使うことを前提としていますが、実践例5では、そうした機材が使えない場合（教室環境）でも使用できる手軽なICT教材「らくらくペン（成美堂）」を使用しました。

・ 実践の様子の動画はありませんが、「資料フォルダ」内に実践中の子どもたちの様子が報告されています。

実践でのポイント

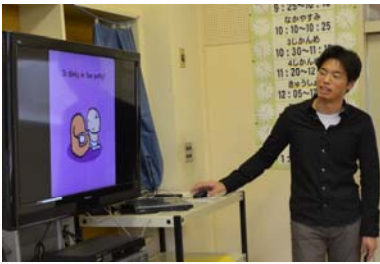
外国語活動の時間というと、「英語を発話しなきゃ（させなきゃ）」という思いに駆られます。でも、子どもたちの中には、発話が困難な子もいるのです。

「分かっている」ということを先生や友だちに知ってもらえたり、「もしかしたら（たぶん）～かも」と思っていることを表出する手助けをすることも大切です。

子どもたちが先生になってクイズを出し合う活動など、他者とのかわりをもつ活動ができました。

「子どもの発話の代わりに」を担ってくれるICT教材もあります。そうした教材を使って子どもたちの代替コミュニケーションを可能にしてみてもはどうでしょうか。

実践者からのコメント



久保 稔（中富良野町立中富良野小学校）

実践例1と2を担当しました。子どもの特性に応じながら楽しくコミュニケーション活動を行うことができる外国語活動は、特別支援学級の子どもたちにとってうってつけだと思います。日常の実践にICTという工夫を加えることで、子どもたちのよさを引き出すことができました。ぜひとも多くの先生方に実践していただいて、ご意見ご感想をいただけたら幸いです。



塚田初美（旭川市立愛宕小学校）

実践例3を担当しました。自分の思いや願いをことばに置き換えたり、文としてまとめることの苦手さから相手にうまく伝わらず、誤解やトラブルを招いてしまうといった「困り感」を持つ子どもたちがいます。英語が、非言語コミュニケーションツールとしても優れていることに着目し、SSTとして外国語活動に取り入れてみようと考えました。さらにICTとの組み合わせで、表情を読み取る力や自分の思いを伝える力など、日常生活に役立つスキルを身につけることができるのではないかと思います。ご活用いただければ幸いです。



松田泰生（旭川市立向陵小学校）

実践例4を担当しました。ICT教材を導入することにより、「言語を学ぶ」のではなく「英語というコミュニケーションツールに触れる」という感覚で外国語活動を進めることができました。デジタル教材の中には難しいフレーズも出てきますが、それらを省き、本質的な部分に絞ることで、特別支援学級でも外国語活動に取り組むことができました。



中川麻衣子（旭川市立永山南小学校）

実践例5を担当しました。私の学級の児童が好きな動物を選び、外国語活動に取り組みました。児童が順番にサイコロを転がし、出た動物を英語で発音して動物園に貼り付けていく、という活動です。らくらくペンとポスターを活用することにより、英語が発音できない場合でも、子どもたち同士で問題を出し合うといった活動も可能となりました。

ご協力いただいた先生からのコメント



清水忠明（AEEN代表）

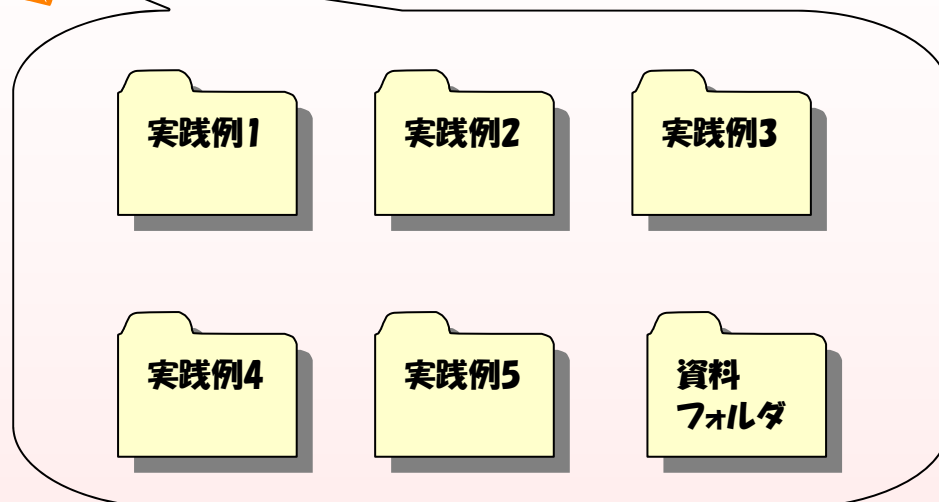
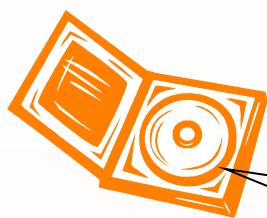
AEENでは、これまで外国語活動の研修とともに「特別支援教育における外国語活動」についても、研修を進めてきましたが、今回の外国語活動におけるICTを効果的に活用する実践から、子どもたちの理解を助けたり、発話を促したりするなど、新たに多くの成果を残すことができました。その授業実践や実際に使われた教材の一部が、この研修資料の中でご覧いただけます。特別支援教育に関わる先生のみならず、4月より実施されます小学校外国語活動の実践に、少しでもお役に立てることができれば幸いです。



小山俊英（AEEN統括コーディネーター）

生き生きとした表情で外国語活動に向かう特別支援学級の子どもたち。特別支援学級の子どもたちを惹きつけるICTの活用と外国語活動そのものが持つ楽しさの相互作用によるものではないでしょうか。この研修資料では、ICTを使用することで子どもたちが生き生きと活動に参加する様子と実践に基づいた資料とをご覧いただくことができます。また、特別支援教育だけではなく、通常学級の実践にも活用できる内容になっています。多くの先生方に研修等で活用していただきたいと思います。

付録DVDの内容について



付録のDVDのフォルダ構成は上記のようになっています。

『実践例1～5』の各フォルダには、本パンフレットで紹介した実践例に関する「授業風景の動画」や「画像」、「指導案」、「実践上の留意点」などのファイルが収められています。

また、『資料フォルダ』には、特別支援学級で外国語活動を行う際の一般的な留意点や関連する資料、本パンフレットを使った校内研修の手引きが収録されています。

研修やICT教材作成など、自由にご利用いただいてもかまいませんが、このガイドを利用したことがわかるように、引用元を明記していただけたらとおもいます。

このパンフレットは、「平成22年度先導的実践研究助成」
（財団法人 パナソニック教育財団）により行われた実践事業「特別支援教育での外国語活動におけるICT活用促進を目指した参加型校内研修の企画・運営ガイドの開発」によって作成されたものです。

本ガイドおよび付録DVDの内容は、Web上で更新してゆく予定です。最新版は下記のサイトで確認できます。なお、Web配信は、平成23年4月以降を予定しています。

<http://www.pef.or.jp/index.html> （パナソニック教育財団HP）

<http://web.eec.ehime-u.ac.jp/> （愛媛大学英語教育センターHP）

『ICTを使って外国語活動！ 特別支援学級編』

初 版 印 刷 平成23年 3月20日

発 行 財団法人 パナソニック教育財団

（研究代表者）	中 山 晃（愛媛大学 准教授）
（共同研究者）	吉 田 広 毅（常葉学園大学 准教授）
（共同研究者）	久 保 稔（中富良野町立中富良野小学校 教諭）
（共同研究者）	塚 田 初 美（旭川市立愛宕小学校 教諭）
（共同研究者）	松 田 泰 生（旭川市立向陵小学校 教諭）
（共同研究者）	中 川 麻衣子（旭川市立永山南小学校 教諭）
（共同研究者）	清 水 忠 明（旭川市立近文小学校 教諭）
（共同研究者）	小 山 俊 英（旭川市立北光小学校 教諭）